



近代文学研究叢書  
第三十四卷

昭和46年7月15日 印刷  
昭和46年7月25日 出版

[ ¥ 2500 ]

著 者

昭和女子大学近代文学研究室

発行者

東京都世田谷区太子堂二丁目七番地  
小林 寅次

印刷者

東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地  
梶原 忠幸

発行所

東京都世田谷区太子堂二丁目七番地  
近代文学研究所  
振替口座東京 一七〇八六七番  
電話代表 (422) 五一三一番

# 近代文学研究叢書

## 第三十四卷

昭和女子大学

近代文学研究室

利得

池石上太岡荻片金河木坂佐笹佐山島玉辻内成能浜人保本村吉

夫孝雄都吉郎賢勝濯鑑助二允友二明郎郎修英二智水生郎吉男貞鑑

「晋其角」——文芸双書第一編（明治三十三年三月刊）「雨華抱」——双書第二編（明治三十三年四月刊）所収（昭和女子大学蔵）

上段右、知十肖像（大島宝水氏蔵）

上段中、句集「鶯日」——昭和八年九月刊（昭和女子大学蔵）

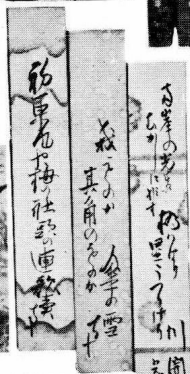


二段右、「玉菊」とその三味線——月刊昭和女子大学蔵（大島宝水氏蔵）

知十句碑

「仏生」も復活も「花笑」王子飛鳥山公園内にある句碑

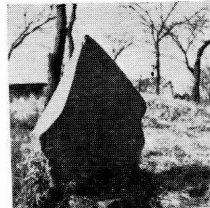
三段右、「俳趣画趣」——明治三十八年九月刊（昭和女子大学蔵）



三段中と左、知十主幹の俳諧雑誌「半面」創刊号——明治三十四年八月刊

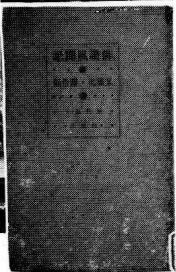
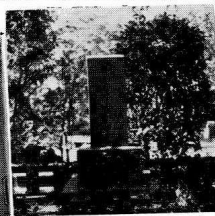
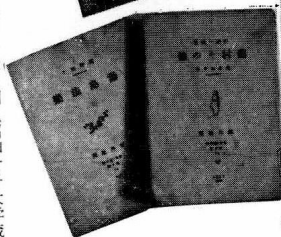
「新江戸」初編——明治四十四年三月刊

「郊外」創刊号——大正十二年四月（以上昭和女子大学蔵）



「蕪村その他」——大正十三年十二月刊（昭和女子大学蔵）

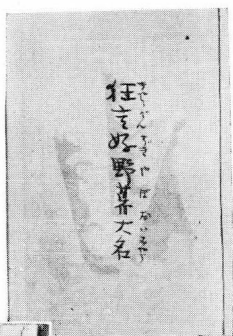
「湯島法案」——大正十三年十月刊（昭和女子大学蔵）



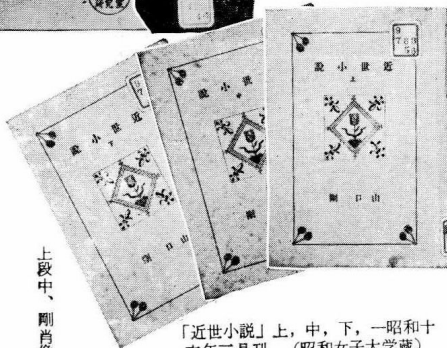
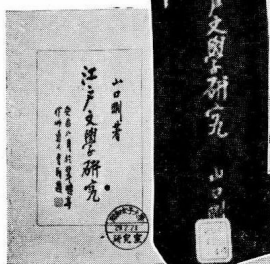
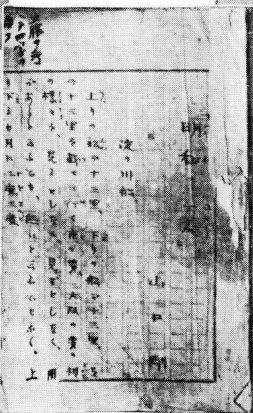
多磨霊園にある知十の墓  
「俳諧風聞記」——明治三十五年十一月刊（昭和女子大学蔵）

山 口 剛

県立土浦中学校校友雑誌「修進」所載（明治三十五年九月号）の紀行文「みちの秋雨」（土浦高校図書館蔵）  
「江戸文学研究」昭和八年十月刊（昭和女子大学蔵）



小もの物語 山口剛  
明治三十五年九月号  
修進  
（土浦高校図書館蔵）



中央、剛遺稿「明和の人々」の一部  
上段右、「日本名著全集」江戸文芸  
之部中の題辭（昭和女子大学蔵）  
右下、土浦市築地町浄真寺にある剛  
の墓  
右中、「西鶴成美一茶」一昭和六年  
十月刊  
「断碑断章」一昭和五年十二月刊  
「紙魚文学」一昭和七年六月刊  
（以上昭和女子大学蔵）

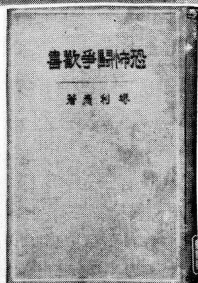
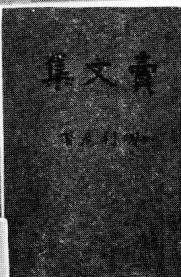
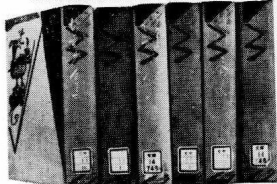
上段中、剛肖像

「近世小説」上，中，下，一昭和十  
六年三月刊（昭和女子大学蔵）

利彦肖像



自筆稿本の一部  
三十歳時自筆の一部



「恐怖闘争歓喜」——大正九年四月刊  
(昭和女子大学蔵)

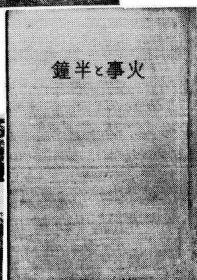
雑誌「新社会」(へちまの花改題)  
大正四年九月号(昭和女子大学蔵)



第一号

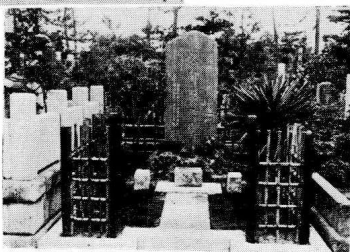


「桜の国地震の国」  
——昭和三年十月刊  
(昭和女子大学蔵)



「火事と半鐘」——大正十年七月刊  
(昭和女子大学蔵)

鶴見の総持寺にある利彦の墓  
二段左、「堺利彦全集」一  
六巻——昭和八年刊  
(昭和女子大学蔵)



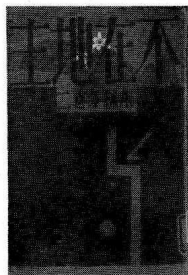
中央「売文集」——明治四十五年五月刊(昭和女子大学蔵)

# 小林多喜二

多喜二肖像

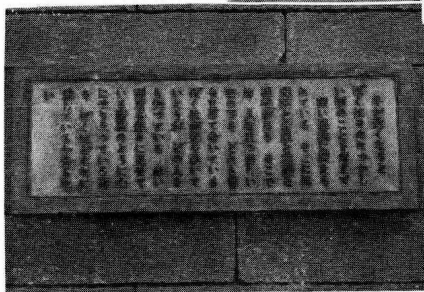


「一九二八年三月十五日」  
「昭和五年五月刊」  
（昭和女子大学蔵）



上段左、「不在地主」―昭和五年  
月刊  
（昭和女子大学蔵）

上段中、「暖味屋」ノート原稿―  
（手塚英孝蔵）



多喜二の文学碑文

三段左、「沼尻村」―昭和七年  
十二月刊  
（昭和女子大学蔵）



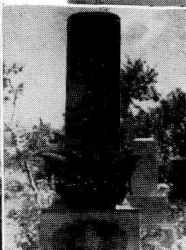
三段中、「東俱知安行」―昭和六年三月刊（昭和女子大学蔵）  
「戦艦」昭和四年五月号所載（昭和女子大学蔵）

「地区の人々」―昭和五年八月刊（昭和女子大学蔵）

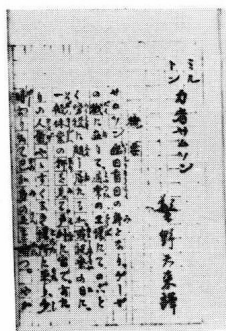
→小樽市旭展望台上にある多喜二文学碑



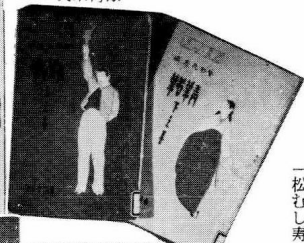
←小樽市奥沢五丁目にある多喜二の墓  
（岩坂桂二氏蔵）



繁 野 天 来



← 天来肖像



上段右、「青葉若葉」上巻——明治三十六年二月刊

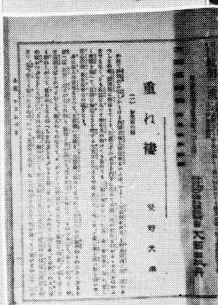
(昭和女子大学蔵)

「松むし寿々虫」——明治三十年五月刊

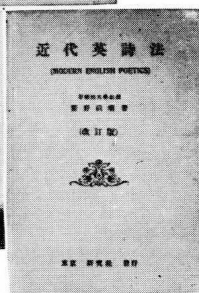
(昭和女子大学蔵)



Paradise Lost  
John Milton



「ダンテ神曲物語」——明治三十六年十二月刊  
(昭和女子大学蔵)



「近代英詩法」——昭和六年五月刊

(昭和女子大学蔵)

中段中、「重ね楼」——文芸倶楽部明治三十年三月所載(昭和女子大学蔵)

上段左、天来訳の「ミルトン力者サムソン」原稿の一部(繁野久子氏蔵)

左中段、「Paradise Lost」

——大正十五年十月刊

(昭和女子大学蔵)

天来の墓のある静岡県富士大石寺

「ミルトン失楽園物語」——明治三十六年三月刊(昭和女子大学蔵)



松 居 松 葉

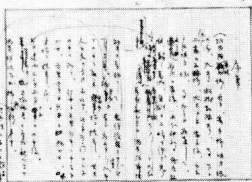
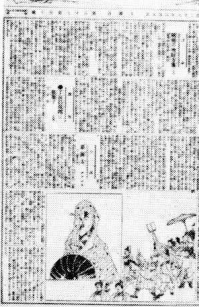
松葉肖像（谷中春性院蔵）



如女戯曲「昇旭朝鮮太平洋記」——明治二十七年九月  
 十月「読売新聞」連載（国会図書館蔵）

「団州百話」——松翁篇  
 明治三十六年十一月刊  
 （松竹園書館蔵）  
 松葉戯曲集「悲劇喜劇」  
 大正元年刊  
 （昭和女子大学蔵）

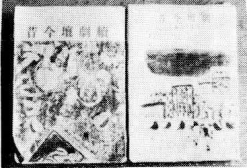
報新報知



小説「悪源太」第一回——報知新聞所載（明治二十八年六月八日）（国会図書館蔵）  
 上段中、楠木正成脚本原稿（早稲田大学演劇博物館蔵）



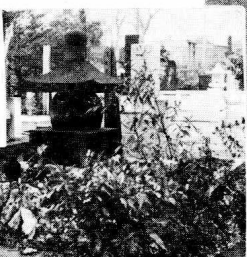
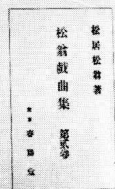
松葉脚本



「劇壇今昔」（上・下）  
 大正十五年五月〜七月刊  
 （昭和女子大学蔵）



「二十世紀」舞台写真 文芸  
 協会上演 大正元年十一月於  
 有楽座（昭和女子大学蔵）



谷中徳川墓域内にある松翁の墓

「松翁戯曲集」第一（大正十五年八月）二卷（昭和二年十一月刊）（昭和女子大学蔵）

中二段、  
 「松葉脚本集」  
 大正四年三月刊  
 （昭和女子大学蔵）



# 目次

|         |          |             |       |
|---------|----------|-------------|-------|
| 口       | 第三十四卷の成立 | 昭和女子大学編集室   | (一〇)  |
| 凡       | 例        | 近代文学研究室     | (一五)  |
| 岡       | 野知       | 近代文学研究室     | (一七)  |
| 山       | 口剛       | 近代文学研究室     | (一九)  |
| 堺       | 枯川       | 近代文学研究室     | (三七)  |
| 小       | 林多喜二     | 近代文学研究室     | (三七)  |
| 繁       | 野天来      | 近代文学研究室     | (三〇一) |
| 松       | 居松葉      | 近代文学研究室     | (三七)  |
| 近代文学芸年表 | (64)     | 近代文学研究室     | (四七)  |
| 卷末付記    |          | 近代文学研究双書編集室 | (五二七) |

## 第三十四卷の成立

本卷は昭和期第九卷として、昭和七年八月から昭和八年七月までに歿した左記六名の研究調査を収めた。

岡野知十は安政七年（一八六〇）二月十九日、幕府役人の父昭胤の四男として北海道日高国に生まれた。明治元年九歳の時上京、青年時代は断続的に教師の職にあったが、明治十六年に函館新聞に入社、主事として在函八年間、新聞記者のかたわら江戸文学研究に没頭した。帰京後は戸川秋骨、大野西竹、島崎藤村ら当時の文人や画家と交り、明治二十六年「しがらみ草紙」にはじめて借蒼居の名で俳話を執筆してより俳壇での活躍がはじまる。二十八年「東京毎日新聞」に「俳諧風聞記」を掲げ新旧交替期の俳壇を評した。同年十月に誕生した「秋声会」には正味の号で創立当初より参会した。が、間もなく脱会して雀会を起こし三十四年八月雑誌「半面」を創刊した。かたわら俳諧の史的研究に従い新々派の俳調を鼓吹することを主張、共鳴する者があった。三十六年二月、俳論をまとめた「最近俳風の傾向」を「半面」に執筆。「晋其角」「雨華抱一」など評伝ものにも意欲をもやした。「半面」は創刊以来休刊復刊を重ねつつ四十一年「新半面」と改題された。句風は新しくはないが軽妙で即興的、晩年に及んで趣味的となる。死後編まれた句集「鶯日」や「味餘」がある。

山口剛は明治十七年（一八八四）三月一日、代言人の父山口常太郎、母なかの一子として茨城県新治郡土浦町に生まれた。小学校時代より成績優秀で明治三十八年七月東京専門学校国漢科を首席で卒業。二十三歳で群馬県の中学教師となったが四十四年六月坪内逍遙の招きで早稲田中学校の教諭となる。大正元年九月早稲田大学高等師範部講師となり同四年から五年間女子英学塾の講師として江戸文学、現代文学を担当名講義で人気を博した。この頃から難聴、中耳炎、肺病を併発暗い闘病生活を送ったが九年四月、早稲田高等学院教授となる。さらに十二年の関東大震災による和漢蔵書二万冊の焼失という致命的な傷手と大きなハンディをのり超えその研究生活は本格的となる。近世小説全般にわたる江戸文学研究は単行本として歿後に成った「江戸文学研究」「近世小説」に代表される。また近松研究、怪異小説研究も多く、随筆、雑録は「断碑断章」「紙魚文学」に代表される。早稲田大学文学部教授の現職のまま胆石症のため死去、享年四十九歳。

堺枯川は明治三年（一八七〇）十一月二十四日父小倉藩々士堺得司、母コトの三男として福岡県仲津郡豊津村に生まれた。豊津中学校卒業後上京、第一高等中学（一高）に入学したが二十三年中退、その頃大阪文壇で活躍していた兄乙槌を頼って上阪、兄により「大阪朝日」系の浪華文学会に加わり「隔屏物語」は森鷗外に認められて「しがらみ草紙」に掲載された。その後教員生活三年のち新聞記者及び新聞小説作家として苦しい文筆生活を送った。明治三十二年「万朝報」に入社、論説欄に選挙権の拡張、労働者の保護、資本家打倒などを論じて社会主義を唱えた。三十六年日露戦争中幸徳秋水らと非戦論を唱えたことが社の方針に反し、退社のやむな

きに至る。同十一月週刊「平民新聞」を発行、四十年六月赤旗事件に連座して徴役二年の刑を受け入獄。このため大逆事件の難をのがれた。十二月末売文社を創立。新聞雑誌の原稿製作、外国語の和訳、日本文の外国語訳、演説の筆記その他の文芸製作など文を売って同志の生計と連絡をはかった。大正三年機関月刊紙「へちまの花」発刊、四年「新社会」と改題して続刊し運動の再興につとめその基礎をすえた。昭和六年二月豊津に堺利彦農民労働学校を創立。八年一月二十三日脳溢血のため自宅で死去、享年六十三歳。主著に「堺利彦全集」六卷（昭和）、「日本社会主義運動史」（昭和二九）などがある。

小林多喜二は明治三十六年（一九〇三）十月、秋田県北秋田郡下川沿村の没落した貧しい農家に生まれた。四、五歳の頃北海道に渡り伯父の援助を受けて庁立小樽商業学校に入学し伯父の経営するパン工場の手伝いをしながら通学した。四年生の頃から水彩画、詩、短歌、小品などを書きはじめ卒業期になって回覧雑誌「素描」が廃刊になると習作の原稿を「生まれ出づる子ら」として友人に批評を求めた。大正十三年三月小樽高商を卒業北海道拓殖銀行小樽支店に入社、有能な銀行員として同僚の評判もよかった。同年、同人雑誌「クラルテ」を創刊しその編集責任者となった。翌十四年上京して東京商科大学の入学試験に失敗、却って制作に打ち込む動機をなした。帰郷後「一九二八年三月一日」をなし「戦旗」に掲載された。これにより彼は新進プロレタリア作家としての脚光を浴びた。しかしその代表作は「蟹工船」で当時のプロレタリア文学の到達した最高水準を示したといわれる。昭和五年三月上旬、「戦旗」巡回講演中共産党財政援助の罪で大阪で捕えられ一旦釈放

されたが治安維持法及び不敬罪で再び逮捕される。共産党に入党した十月芸術協議会員に選ばれるなど精力的な執筆活動を続けていたが同志の検挙で身の危険を感じて志賀直哉を奈良に訪れ、非合法生活に入った。昭和八年「党生活者」を発表、地下活動を続けていたが秘密警察のスパイにより築地警察署に拘引され悲惨な死を遂げた。享年二十九歳。

繁野天来は明治七年（一八七四）二月十六日、父徳島藩士繁野傑、母イサの長男として生まれた。明治二十六年大阪府尋常小学校を卒業、同年九月上京東京専門学校文科に入学、坪内逍遙の講義に傾倒した。新体詩勃興の機運にあった当時の文壇で彼は天来の雅号で盛んに五七調の詩を試み作品を発表したが、明治二十八年十月の「早稲田文学」に掲載した長編抒情的叙事詩「霜夜の月」はその代表作といわれる。三木天遊との合著詩集「松むし寿々虫」（明三〇・五）は天来唯一の詩集である。中学校教師を経てのち早稲田大学教授となり英文学を講じた。「青葉若葉」「ミルトン失楽園物語」「ダンテ神曲物語」を次々出版。昭和八年二月「ミルトン失楽園研究」で文学博士の学位を得た。翻訳にはミルトンの「失楽園」メレディスの「エゴイスト」など。また「近代英詩法」や数種の翻案を残して昭和八年三月肺臓癌のため死去。享年六十歳。

松居松葉（後に松翁）は本名を真玄といい明治三年（一八七〇）二月十八日、宮城県仙台城下塩釜町に生まれた。幼時より両親の愛に恵まれず、十八歳の春福島教会でキリスト教に入信、専修学校で経済学を、国民英学会で

英語を学ぶ。のち坪内逍遙の門下生となり「早稲田文学」創刊に際し編集の一員に加えられた。処女脚本は明治二十七年読売新聞に発表した「昇旭朝鮮太平記」(五幕)。中央新聞の記者となり、「報知新聞」「万朝報」にも執筆し、文芸、社会、政治と各部門に活躍。明治三十二年十月初世市川左団次の依頼によって自作の小説「悪源太」を脚色したがこれは当時における部外劇作家の作品上演の嚆矢となった。左団次没後は遺子二代目左団次の相談役となり自作脚本執筆上演をしながら三十九年には欧米演劇視察のため外遊。その後芝居茶屋制度の改革など革新興業を行なったが、改革が急激に過ぎ失敗に終わる。この責を負って明治座を去り静岡県下に移した。四十二年再び上京、坪内逍遙に推されて島村抱月が去ったあとの文芸協会に入り附属研究所講師となつて発声法、実演研究を担当し、後半期の協会で企画面、演出面に活躍した。「袈裟と盛遠」「神主の娘」「結婚反対倶楽部」「秀吉と淀君」「茶を作る家」「ボンドマン」など史劇、創作物、翻案など百五十余篇に上り、それぞれの分野で西洋的感覚と手法をとり入れている。その他「純機翁冒険談」「二十世紀」などの翻訳も多く西欧戯曲の紹介普及に務め、演出者の必要と意義を主張実践した。昭和八年七月、東京の自宅で病没、享年六十四歳。(昭和女子大学編集室)

## 凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑、金子健二の四先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであろう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名